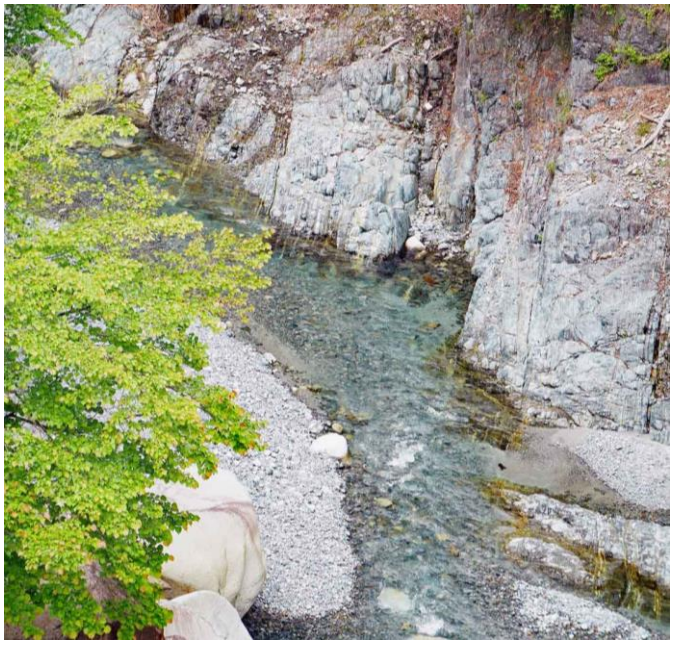
丹沢ボラネット瓦版

2024年11月号　No.120



玄倉川渓谷　（神奈川県の石、トーナル岩の白い岩）

令和6年度丹沢大山ボランティアネットワーク講演会・交流会

厳しい残暑が続いていた９月１４日、自然環境保全センターにて、講演会・交流会を開催しました。

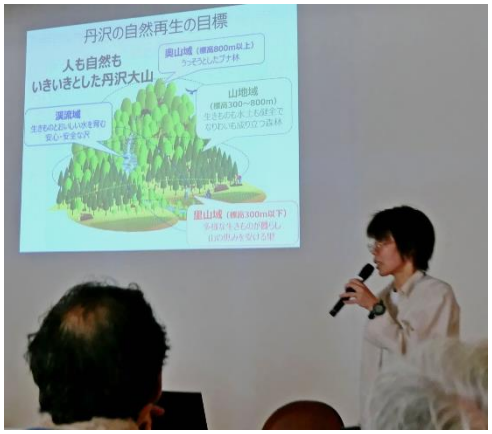
ボラネット各団体や、神奈川県フィールドスタッフ、野生動物救護ボランティアの皆様など 50 名が、会場の自然環境保全センターレクチャールームに集まりました。盛況だった昨年を上回る人数です。

団体紹介

小林代表の挨拶に続き、山口副代表の進行により、自己紹介を兼ねて参加したボラネットの各団体から1分間ずつの団体紹介を行い、続いて2団体から、詳しく活動報告がありました。

年間に延べ1000日を超える山行を実施している町田グラウス山の会、クリーンハイクを43年間続けている神奈川県勤労者山岳連盟、「どぶろく」の醸造・販売を始めた四十八瀬川自然村など、短い時間のなかでも、各団体の個性的な活動が報告されました。また、伊勢原森林里山研究会からは「薬草を訪ねる会」のお知らせがありました。

報告 「丹沢大山自然再生計画の進捗状況について」



自然環境保全センター自然再生企画課の内山佳美副技幹から、スライドと資料で説明がありました。

- 丹沢大山の自然再生は市民、企業、団体、専門家や行政機関など多様な主体で構成される「丹沢大山自然再生委員会」が中心となって取組みを進めている。ボラネットもその構成員。
- 丹沢では1990年代と2000年代の二度にわたり市民、専門家と行政による自然環境の総合的な調査を行った点が大きな特徴である。
- 自然再生計画では、「人も自然もいきいきとした丹沢大山」を目標に、奥山域、山地域、渓流域、里山域ごとの課題に対する方向性を示し、多様な主体が再生に取り組んでいる。
- 奥山域ではシカの影響による自然植生の衰退に対して、植生保護柵やシカの捕獲によりある程度の効果（変化）が見られる。（目標達成ではない）
- 山地域では人工林の間伐が進んだほか、シカ対策の効果もあり、シカが嫌いな植物を中心に、ではあるが一定の植生回復が見られる。
- 一方で、里山域の地域の再生にはもっと力を入れていく必要がある、との意見が、再生委員会内では出ている。来年1月25日（土）には秦野市で、里山をテーマに活動報告会を開催予定。ぜひ参加していただきたい。

質疑では、シカ対策関係や、自然再生にどこ（いつ）まで人が手を加える必要があるのか、といった質問がありました。

講演 「丹沢のツキノワグマについて」

長縄今日子さんに丹沢のツキノワグマ（以下、クマ）についてご講演いただきました。

長縄さんは、学生時代から、丹沢山地でクマの生態調査等に携わり、現在でも丹沢を中心にクマの痕跡調査や普及開発活動に関わっています。2012年には、仲間と「丹沢ツキノワグマ研究会」を設立し、代表を務めているほか、「日本クマネットワーク」（以下、クマネット）や「丹沢自然保護協会」、「丹沢資料保存会」の会員として、自然環境保全全般に係る幅広い活動を行っています。

長縄今日子さんによる講演

また、公益財団法人神奈川県公園協会の職員として県立宮ケ瀬ビジターセンター、秦野ビジターセンターなどに勤務し、丹沢山地の自然や登山に関する普及啓発に携わり、現在、県立茅ヶ崎里山公園に勤務されています。

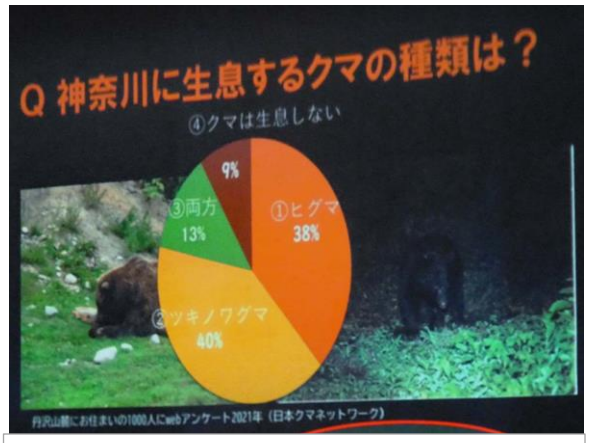
【主な著書】
- 「ふるさと宮ヶ瀬・渓谷の村から」（夢工房）（共著）
- 「丹沢自然ハンドブック」（共著）

講演では、クマの生態、課題、山での対策などについて、スライドと標本やはく製などを使いながら、長縄さんが実際に調査・研究された体験などを交えてお話がありました。

以下、講演の内容を少しご紹介します。

長縄さんが用意してくださった毛皮、頭骨、胃内容物などの標本などや、自然環境保全センターのツキノワグマのはく製が会場に展示され開会前から興味津々

・ツキノワグマは北海道以外に生息。九州では絶滅、四国では絶滅危惧。
・丹沢の熊は比較的小柄な個体が多く、また、食いだめなどにより体重の季節変化も大きい。だいたい 40 kg～100 kgの個体が多い。
・調査から、丹沢のクマのエサカレンダーは次のとおり。
・春：花芽や芽吹き、ササ・タケの芽のほか、死んだシカの肉も食べている。雪国では積雪下のドングリを利用。
・夏：草本、アリ、ハチなど。テンナンショウも食べる。カスミザクラ、ミヤマザクラ、オオシマザクラ、ヤマザクラなどの実（サクランボ）をよく食べ、結実に合わせて標高を上げて移動し長い期間利用する。常緑樹ではタブの実も利用。
・初秋：ウワミズザクラの実、ミズキ、オニグルミ。ミズキは豊凶の年較差少ない。
・晩秋：ヤマボウシ、コナラ、ミズナラ、ヤマグリ。ミズナラはナラ枯れの影響ある。常緑樹ではアラカシ（紀伊半島でも利用報告あり）。ブナは、丹沢が（日本海側のように）ブナ純林地域ではないので依存度は低め。豊凶差も大きい。
・無線発信機をクマにつけた調査（テレメトリー調査）の結果（1990 年代の調査事例）では、メスの行動範囲はオスより狭めで約 33 ㎢、オスは約 100 ㎢。オスは山北から津久井までといった広い範囲を移動していて、特にエサが少ない年は行動範囲が広い。縄張りは持たない。6～7 月が交尾期。
・2006～2009 年に行ったクマの毛の遺伝子調査で、丹沢のクマの数は約 40 頭程度と推定。道志村などの山梨や東京などとの個体の往来はあるようだ。



クマネットが市民１０００人に行ったアンケート結果（ヒグマがいるという回答が 5 割超）。正解はツキノワグマ。

・テレメトリー調査では、根上がりした木の根元や岩穴を使って冬眠していた。丹沢には洞ができるような大木は少ない。調査当時はシカの管理捕獲を行っていなかったので、高標高の特別保護地区が主な冬眠場所の一つ。冬眠しないのでは？という声も聞くが、ほとんどのクマは冬ごもりし、12 月中旬から 4 月下旬（オス）、5 月下旬（メス）くらいまでは動かない。冬眠中、猟犬等に起こされて移動する個体もいる。シカの管理捕獲中に冬眠から起きてやむを得ず捕獲された事例もあった。

クマの一年（右下の指し棒はシカの角！）

・ここ数年、全国的にクマの出没、被害情報が多い。県内でも人里近くでの目撃例も増えている。30 年くらい前は人里に出るようなことはあまりなかった。
・柿、栗、養蜂、養鶏などで被害がある。放置された柿は格好の餌場となる。
・イノシシの罠にクマがかかる事例（錯誤捕獲）もある。手をちぎって逃げる例も。クマがかかりにくい構造・架設方法の罠を地元の方に紹介する活動もしている。錯誤捕獲はクマにとっても、捕獲従事者にとっても危険。錯誤捕獲で1足を欠損した個体は、より農作物に頼りがちにもなる。
・箱罠等で捕獲し、唐辛子スプレーを噴霧して山に放獣（学習放獣）も行われているが放獣場所の調整が難しい。
・2006 年～2009 年に行った堅果類の生産量調査では、豊作年のブナ＞低標高のコナラ・クリ＞凶作年のブナとなった。手入れ不足の里山林は結果的に豊富な餌場となっている。クマとの軋轢を防ぐために、クマが近づきにくい集落作りが大切。放置果樹の収穫や移動（隠れ場）となるヤブの刈払いなど。高さ 60 cmくらいのヤブでも、クマは身を隠して移動できる。
・クマに会わないためには、クマがいそうなところや時間帯を避けることも大切。春の竹ヤブや沢沿いはお互いに音が聞こえにくいこともあり危険。朝方や夕方（15 時から 20 時くらい）は活動時間。会ったら刺激しないこと。複数で行動し、クマがいそうなところでは音を出しな

がら歩く。襲われたらうつ伏せで首を手などでガード。ザックは背負ったまま（背中をガード）。リュックを置いて逃げるのは厳禁（餌を覚えてしまう）。
・クマの痕跡を探してみよう。木の爪あと、木から降りるときに引っかき傷がつきやすい。樹皮ハギはシカもするが痕跡は異なる。カモシカはクマと誤認しがち（丹沢のカモシカは黒っぽい個体が多く、角や耳が隠れていると見間違う。）
・2012年から、丹沢ツキノワグマ研究会で、痕跡調査などを1～2か月に1回くらいのペースで実施。フン分析で調査した種子を自然環境保全センターに提供して苗木にしてもらっている。クマは消化率が低いのでフン中の種子をアカネズミなど他の生物が利用することでさらに種子が移動する。
・クマは生態系を代表するアンブレラ種と言われ、クマが棲み続けるためには豊かな森林が必要。クマについては誤解が多く正しい理解も必要。

質疑では、クマの行動や食性などについて、多くの質問がありました。科学的に未解明なことも多いようですが、長縄さんの豊富な経験から、分かっている範囲で丁寧にご説明いただきました。

閉会のあいさつでは、小野副代表が、活動地の水田で見られるカヤネズミの巣について触れ、また、今後の団体間の交流に期待して会を閉じました。

丹沢大山ボランティアネットワーク講演会・交流会アンケート集計結果

1　今回の講演会・交流会の満足度を教えてください。
大変満足　67%　やや満足　33%　やや満足していない・満足してない　0%

2　1のように感じた理由（一部抜粋）
・″丹沢大山″、″丹沢のクマ”共に最新のお話を聞くことができてとても有意義でした。自然再生では市民活動と息の長い活動が最重要と再認識できました。
・説明が丁寧でわかりやすかった。クマが棲み続けることが出来る豊かな自然は人間にとっても生き物にとっても豊かな自然である。
・各団体の取り組みを知るきっかけになったこと。各団体の課題を知れたこと。（もっと交流を深めたい）

クマによる樹皮剥ぎ（クマハギ）

門田 真人先生を偲ぶ

丹沢大山ボランティアネットワーク世話人会

地質学者　門田真人先生がお亡くなりになりました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

2004年から2020年の長年に亘り「夏休み親子自然探検隊」の運営や講師として多大な援助を頂いてきました。
本当にお疲れ様でした。
本当にありがとうございました。

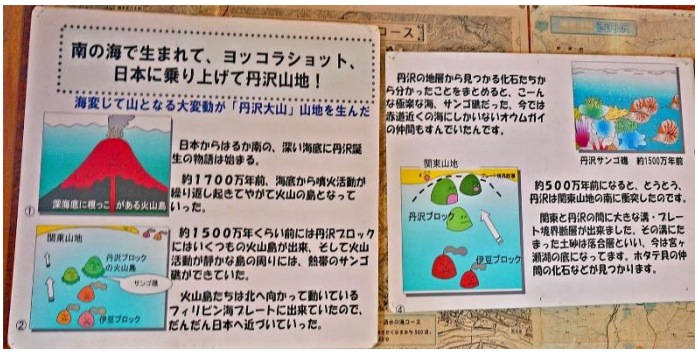
門田真人先生を偲んで先生の功績や活動の様子を紹介します。

↑2015.7.25　山北町ふるさと交流センター

業績1　地質学分野

「丹沢はやっぱりトロピカルアイランドだった」を唱え丹沢岩石の中に熱帯の珊瑚礁化石を探索し発見しました。

→写真　2015.7.25
夏休み親子自然探検隊の時、ひょうたん島のように、南海から火山島が日本列島に近づき乗り上げる説明文



門田先生等が子供達や大人に向け、興味を喚起し理解し易い展示をしました。

→写真　2015.7.25
門田先生等が丹沢から収集されました珊瑚の化石と現物の珊瑚展示

プレートテクトニクス理論による丹沢の生い立ちを説明する裏付けとなる丹沢の珊瑚化石の発見に貢献されました。以前の理論は同じ場所での造山運動でした。

業績2　皆瀬川の巨大岩石群の石灰岩を発見しその保存に努め、そして皆瀬川の丹沢内での価値を見いだし、野外探検活動のコースを開発しました。

　丹沢研究者も、親も子供達も最適な探求学習が出来るようになりました。そして丹沢地域の環境教育や人材育成に務めました。

→写真　2016,7.23
山北町ふるさと交流センター
皆瀬川探検活動のための事前学習の様子

→写真 2016.7.23
皆瀬川神縄(かんなわ)断層での説明の様子

　現地で実物を見せ、掲示板を使用し分かり易く説明していました。門田先生の落ち着いた分かり易いお話には驚愕します。

　人が立っている場所→足柄層群(新しい地層)

　後ろの高い崖→丹沢層群(古い地層)

　上の地層が古く、下の地層が新しいので大逆転が起こっています。

　神縄逆断層の学習には最適な場所です。

↑2016.7.23 巨大石灰岩を磨いて保存に貢献　丹沢環境啓発体験活動の様子

↑2019.7.24山北町人遠皆瀬川の石灰岩

業績3　神奈川県の石(化石)、丹沢層群の珊瑚化石指定に貢献しました。

門田真人先生は丹沢研究や人材育成に多大な貢献をされました。
ありがとうございました。 安らかにお休みください。

丹沢大山ボランティアネットワーク団体からの投稿

第42回清掃登山活動報告

NPO 法人みろく山の会

2024 年５月 11 日（土）に、みろく山の会では表丹沢の清掃活動を行いました。

昨年は豪雨で中止となりましたが、今年は 277 名の会員が、12 コースの清掃に参加し、可燃ごみ４１．２kg　不燃ごみ２１５．４kg　計２５６．６kgのゴミを収集いたしました。

緑多い丹沢が後世に残るような気持ちで、参加した会員もリフレッシュした一日となりました。なお、詳しい活動の内容はホームページでもご覧いただけます。

https://npo.mirokuyamanokai.org/activities/shizen_hogo/seisou/seisou-42

9 コース活動２

１１コース活動１

丹沢ボラネット瓦版２０２４年１１月号（通巻１２０号）11 月２６日発行
丹沢大山ボランティアネットワーク世話人会代表　小林　昭五